

平成 26 年度福山大学第 4 回 FD・SD 研修報告

大学教育センター教育開発部門

平成 26 年 10 月 15 日（水）、今年度の第 4 回 FD・SD 研修が、全学教授会終了後、15 号館で実施されました。テーマは「ICT 活用と教育改革に関する事例紹介と考察」であり、「教育改革 ICT 戦略大会（私立大学情報教育協会主催）」と「IT+教育最前線 2014」という学外の ICT 関連の研修大会で得た情報の共有を目的として、参加された 3 名の教職員から報告が行われました。

第一部では、メディア情報文化学科の田中始男先生が、教育改革 ICT 戦略大会（私立大学情報教育協会主催）で得た情報について報告を行われました（写真 1）。紹介事例は、アクティブラーニングと反転学習、学修支援空間に係わる内容でした。

アクティブラーニングについて、講義形式の授業にくらべて提示（提供）できる情報量（新知識の量）は小さくなるという危惧が持たれており、その対策として、反転授業とアクティブラーニングの組合せで効率的な学修を実現している事例が多数あったことが紹介されました。事例のひとつとして、企業支援によって魅力的で高品質な動画教材を反転授業に利用し、対面学習でグループワーク等も行っている <http://gacco.org/> の事例が紹介されました。ただし、高い完成度の教材動画の制作に多大な労力を必要とする点が課題として指摘されていることが紹介されました。

授業外の学修資料を効率よく実用的な時間で制作する方法として、既に授業で使用しているパワーポイント資料に音声解説を付加して動画とし、これを反転授業の授業外学修教材として活用した事例が紹介されました。この事例では音声付加の作業が行われるのみであり、制作の労力が大幅に低減できることも報告されました。事前学修資料の動画を 15 分～30 分で作り、その視聴及びその視聴の報告書を提出させることで授業外学修時間を十分に確保できており、対面授業ではアクティブラーニング形式のみで、一斉講義形式と同量の新知識を提供でき、かつ、知識の定着率向上を確認していることが紹介されました。このように既存のパワーポイント資料に音声情報を付加する方法は福山大学でも実施できるのではないかとの提案がありました。

最後に、各大学の学修支援空間の整備・活性化事例について、次のことが紹介されました。

- ・施設・設備の整備や導入だけでは学生の利用率は向上しない。
- ・支援空間利用のメリットを明確化することで利用率は向上する。
 - 例：グループ作業の必要な課題に対応する場とする。
 - 例：学修支援、特にレポートや卒業論文の作成支援を受けられる場とする。
 - 例：成績不振者向け個別サポートの場とする。
- ・効果は成績上位者に顕著であるという事例報告が多い。



写真1 田中始男先生による第一部の報告

第二部では、教務課の池本大作課長補佐が、「IT+教育最前線 2014」に参加された情報を、教務課職員としての熱いメッセージも込めて報告をされました（写真2）。

最初は、小学校、中学校、高等学校とタブレットを活用した授業が導入されていることに対応した名古屋文理大学の事例で、タブレット端末として iPad を学生に無償配布し、学生世代の情報環境にあわせた教育実践の報告でした。具体的なメリットとして、容易な講義資料配布、理解度等学生の状況把握や学生へのフィードバックの迅速さ等が挙げられていました。iPad は、紙媒体や PC などデジタル機器に代わるものではなく、新しい次元の教育機器として成立していることが紹介されました。

次に、全学 PC 必携化とした九州大学の事例が報告されました。必携化の目的は、①パソコンなしでは成立しない授業が増えていることへの対応、②何時でも何処でも自由に自分のペースで学修できる環境の構築、③予想される必携化に早く対応する（本学もガラパゴス大学とならないため、あらゆる分野で早い対応を！）ということでした。また、必携化の結果、PC を利用した講義が増えていること、将来的に PC 教室を徐々に削減して数年後には廃止する計画であることが紹介されました。九州大学の PC 必携化の話題は、本学の目指す方向性に重要な示唆を与える内容でした。



写真2 池本大作教務課課長補佐による第二部の報告

第三部では、「授業外学習の質の向上を目指して」とのテーマで人間文化学科青木美保先生より報告が行われました（写真3）。

ラーニングコモンズとそれを取り巻く学修環境について教育改革 ICT 戦略大会への参加を通じて得た情報の概況が報告され、その後、同志社大学と立命館大学のラーニングコモンズについて報告されました。

同志社大学のラーニングコモンズは授業外学修の担保と質向上を目的としていること、認知メカニズムに焦点をあてた学生の学修空間であることなどが報告されました。立命館大学のラーニングコモンズは、「ぴあら（ピア・ラーニング・ルーム）」との名称で、学生同士（peer）による主体的で創造的な新しい学びのスタイル創出を目指して作られており、学生自身の手によって自律的に運営されている学修空間であることが報告されました。

これらの二つのラーニングコモンズを訪問し、福山大学図書館長の立場として感じたことを述べ、さらに、同志社大学と立命館大学のラーニングコモンズの事例を参考に、福山大学図書館のラーニングコモンズの強化と有効活用の必要性が伝わるよう、「ぴあら」等のラーニングコモンズの施設を撮影した写真を交えた紹介も行われました。本学の取り組みとしては、「福山大学らしいラーニングコモンズ」として、「教員と学生」がフラットな関係でディスカッションできる場所を作っていくことを目指したいと、教職員の協力を求められました。



写真3 青木美保先生による他大学ラーニングコモンズの報告

最後に、鶴田泰人大学教育センター長により、今回の「教育改革 ICT 戦略大会（私立大学情報教育協会主催）」と「IT+教育最前線 2014」のような学外の研修会で得た情報共有を今後も実施すること、それらの効果事例を参考に大学教育センターを中心として全教職員が一丸となった本学の教育改革を推進することが述べられました。

第4回のFD・SD研修では、教務課職員の池本課長補佐からの報告があり、単なる参加報告ではなく、教務課員として感じている本学の置かれた課題も適切に述べていただきました。また、教授会メンバーに加えて課長級を主とした多くの職員の参加もありました。今後も、教員のみならず職員の方からの情報発信の必要性が強く感じら

れた研修会となりました。

(記：平 伸二)